



|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 北海道の津波に就て   |
| Author(s)        | 河野, 常吉  |
| Citation         | 札幌博物学会会報, 4(2), 190-194   |
| Issue Date       | 1913-04-30  |
| Doc URL          | <a href="http://hdl.handle.net/2115/60864">http://hdl.handle.net/2115/60864</a> |
| Type             | article   |
| File Information | Vol.4No.2_005.pdf   |



[Instructions for use](#)

# 北海道の津浪に就て

河野常吉

## ON THE DISASTROUS TIDAL WAVES IN HOKKAIDO.

By

T. KONO.

大森理學博士が「日本に於ける津浪に就て」の調査は、載せて震災豫防調査會報告第三十四號にあり。其の大津浪分布圖を見るに、北海道に於ては襟裳岬より花咲岬に至る間(南東海岸)に三線、國後島の東南岸に二線、渡島國の全海岸(後志の小部を含む)に一線を引きたり。是れ北海道に於ける古來の大津浪の回數及び其區域を示したるものなるが、遺憾ながら遺漏あり。且つ各津浪の狀況は之を記載せられさりき。

予の調査によれば、北海道に於ける古來の大津浪は、慶長以來七回あり。内五回は太平洋方面に起り、二回は日本海方面に起れり。慶長以前も大津浪ありしならんと雖も、記録の徴すへきものなきを以て之を知ること能はず。下に各津浪の概況を記せん。

(1)慶長十六年(西曆1611年) 冬十月東蝦夷地逆浪あり、海水溢れ和人夷人溺死するもの多し。此の事福山秘府、松前年歴捷徑等に見ゆるも、記事簡單にして詳細を知ること能はず。然れども溺死者多しと云ふに據れば、其の大津浪たりしこと疑なし。

(2)寛永十七年(西曆1640年) 六月十三日午時内浦岳(渡島國茅部郡駒岳) 俄然鳴動噴火し、海水動搖して津浪を生し、百餘艘の昆布採取船の人々、残り少なく津浪に引かれ、和人夷人溺死する

もの七百餘人に及ぶ。此の時北方の有珠に於ては、波浪善光寺如来堂の後山に上りしが、堂は幸に恙なかりき。蝦夷地は津浪未だ至らざる前に鳴動を聞く。松前も亦潮水盈虚あり。此の噴火に岳上焼け崩れ灰塵天に満ちて、十五日朝まで天地真暗にして晝尙ほ燈を用ふ。降灰は越後に及び、津輕にては積ること約三寸なりき。此の事信羅之記録、福山秘府、其の他諸書に見ゆ。

内浦岳は噴火灣の西岸に聳ゆる火山にして、其の噴火の知られたるもの數回ありと雖も、津浪を起したるは唯此處に記する一回のみ。同山は海に近しと雖も陸上にあるものなり。陸上にある火山の活動に原因して大津浪を生したるは、稀有の事にして、貴重なる一現象とすへし。

(3)寛保元年(西曆1741年)七月八日頃より松前地方西方の海上にある大島噴火の噴あり。十五六日頃より福山、江差等に灰降りて地上深きもの數寸に至る。十九日下寅の刻海上大に鳴動し、須臾にして大津浪襲來し、福山より熊石村に至る三十餘里の海岸、悉く其の害を蒙り、大小の船舶難破するもの千五百二十一艘、家屋倉庫の破壊するもの七百九十一戸、溺死するもの千四百六十七人に達し、尙ほ此の外熊石以北の夷地に於て溺死其の他損害少なからず。八月福山の立石野に無縁堂を建て以て死者の靈を吊ふ。此の事福山秘府、松前東西管闕其の他諸書に記す。

古老の傳ふる所に據れば、此の津浪の至る前、海水先づ退き暫くして大浪襲來せりと云ふ。其の他此の津浪の激甚なりし事に就き種々の口碑あるも之を略す。

(4)安永九年(西曆1780年)四月得撫島地震、津浪あり。是の時露人は同島の東岸ヲニノヅに在りしが、同處に碇泊せし露船ナダリヤ號は漂蕩して山に上り、溺死するもの四人ありたり。後露人此の船を山より下さんと苦心せしも、終に下すこと能はざりき。

(5)寛政三年(西曆 1791年)五月二十四日申の刻、西蝦夷地地震ひ、忍路の洞は岩壁崩壊し、又津浪を生して海水陸に上り、濱邊に引揚げ置きたる蝦夷船は残らず流失し、同地の夷人にて出漁せしもの五人溺死せり。美國場所に於ても和人夷人の溺死ありしと云ふ。此の事夷謠俗話に載す。

(6)天保十四年(西曆 1843年)三月二十六日曉、國後、根室、厚岸、釧路大地震あり、津浪を起し、家屋の破壊するもの七十五、船の難破するもの六十一艘、和人夷人の溺死したるもの四十六名なり。此の記事松前家記及び國泰寺日鑑記に據る。

(7)安政三年(西曆 1856年)七月二十三日箱館、室蘭、勇拂等地震ひ津浪あり。函館に於ては同月十九日頃より數回地震を感じ、二十三日九時半時に至り大地震を發し、尋て津浪襲來して市街を浸し、大町邊は海水土藏に入り、鶴岡町邊は五百石積の船街路に上り、築島にては地上浸水五尺に達し家屋の漂蕩し去るものあり。斯くて海水退きて又襲ひ來り、一進一退八九回に及び、夜に入りて定まれり。此の夜市民は處々の板上に露宿し、官に於ては飯の焚出しを爲して之を救助せり。蓋し此の津浪は太平洋中より起りしものにして、奥州宮古附近の如きは被害甚だしく、家屋の倒壊流失百餘に及びたりと云ふ。

尙ほ函館にて此津浪に遭遇したる某氏の談話を聞くに、先づ灣内の水退きたれば、貝を拾ひ魚を捕へんとて出て行きしに、暫くしてゴウゴウ鳴り渡り、津浪至るとて人々騒ぎける故、膠着しつゝありし船に乗りて、津浪と共に市中に入りて漕ぎ廻り水退くときは、船を家の柱に繋ぎ置き、本來れば又漕ぎ遊びたりしと。

備考 以上記載する所の外、小津浪少なからず。殊に低氣壓の際、暴風に伴ふて生せしもの多しと雖も、本篇は大津浪を専らとするを以て、小津浪は之を略す。

前記七回の津浪に就き、之を種々の方面より觀察して、大略下に列記するが如き結果を得たり。

津浪の時期、慶長十六年より今日に至る三百一年間に、七回の大津浪ありて、平均四十餘年目に、北海道の或る部分に、一回の大津浪ありし割合なり。尙ほ各津浪に就て言へば、其の間隔の最も短きは十一年、最も長きは百一年なり。又津浪の起りし月に就て見れば、舊曆三月一回、四月一回、五月一回、六月一回、七月二回、十月一回にして、寒冷の時節よりも溫暖の時節に多しとす。

津浪の原因、寛永、寛保の二回は、噴火作用による地震に起因せり。安永、寛政、天保、安政の四回は地震に起因するも其の地震を起せし原因に至りては之を明にすること能はず。慶長の津浪は記事簡單にして、地震の事を記せざるも、亦恐らくは地震に起因せしにあらざる歟。

津浪を發せし方面、日本海方面に起りしは、寛保、寛政の二回にして、他の五回は太平洋方面に起れり。オコック海方面に至りては一回の大津浪もなかりき。

被害地方、各津浪は何れも北海道の一部を襲ひたるものなるが、太平洋方面は其の回数多きを以て、各地大抵二三回の大津浪に逢ひたるものゝ如し。日本海方面は、寛保の津浪に、渡島國の西部及び後志國の小部、寛政の津浪に後志國の北部が害を受けしのみ、即ち是等の地方は唯一回に止まりたり。日本海方面の北部並にオコック海の海岸に至りては、一回の大津浪にも遇はさりき。

津浪の前兆、大津浪の前兆は、地震、噴火及び海水の著しき減退にあり。然れども地震は多くの場合、津浪の前兆たらざるを以て、單に地震のみを感じて、津浪を警戒せんには、實に其の煩しきに堪へざるべし。海岸に於ける火山の迸發は、時として津浪を生ずべしと雖も、亦之れのみを見て恐怖するは輕卒なり。然れども海水の著

しき減退、殊に其の減退が地震若しくは海岸に於ける火山の活動と相伴ふ場合に在りては、必ず大津浪の前兆として警戒避難するの要あらん。寛保及び安政の津浪の例を見て之を知るべし。總て比較的近距离の處に發生する津浪は、其の海岸に到達する前に於て、先づ海岸の海水を減退せしむるを普通とす。

海岸火山の活動恐るべし、海底に於ける火山の活動が、恐るべき津浪を生ずることは勿論なるも、海岸火山の活動が大津浪を起せし例は世に多からず。然かも北海道に在りては七回の大津浪の内、二回は實に海岸火山の活動より起りたり。即ち大島は周圍一里二町の一孤島にして其の島に於ける火山の大活動は寛保の大津浪を生じ、駒岳(即ち内浦岳)は海岸の火山にして、其の大活動は寛永の大津浪を生じたり。されば北海道に於ては、津浪との關係上、是等海岸火山の活動は、頗る注意を要すべき者たるべし。

終りに臨みて一言す。此の一篇は北海道に於ける舊來の大津浪を概説して、北海道人士の參考に供し、併せて大森理學博士の本邦津浪調査の遺漏を補ひ、以て學界に於ける研究の資に供せんが爲め、起草せしものなり。尙ほ此の篇を讀み給ふ諸賢にして、誤謬若しくは遺漏を發見せられんには、幸に教示を惜み給ふ勿れ。

---